

I 教材に即したよりよい読解指導教材と指導法について

— 高2文学教材の場合 —

実 番

要旨——国語科においては、実際にはいざれかに重点があるにしても、理解と表現の教育ということを忘れてはなるまい。理解の指導過程において、表現の作業、つまり、書くこと・話すことを取り入れることは理解を深め、読むことのよりよい指導がなされる。文学教材を取り扱う場合、教材は重要な意味をもつものであるが、同一教材でも中学と高校では段階に応じた指導法によって、その意味づけをすることができる。

I はじめに

昭和42年11月25日に本校で行なわれた中等教育研究協議会の国語部会で、本校の滝藤教官は、後述のように国木田独歩の『春の鳥』は高2の教材としては問題であるとした。そのときは時間の関係もあって本教材の高校における意味づけにまで至らなかった。そこで、高2で『春の鳥』を扱ったを中心として、教材と指導法について簡単にふれてみたい。

要旨のところで述べたように、私は表現と理解とを密着させ、日常の学習指導においてもいつも意を用いているつもりである。説明的な文章の取り扱いについては、昨年度の紀要第12集で、その一端として、論説文における『考えることと書くこと』について述べた。今年度は文学教材における『理解と表現』の一端を述べようと思う。

II 指導の実際

1. 使用教科書；現代国語二 尚学図書

单元名；小説（二）

教材；春の鳥（全文）国木田独歩

闇の絵巻（全文）梶井基次郎

俘虜記（友軍に置き去りにされた主人公が近づいた若いアメリカ兵を撃たなかった心理と行動を分析した部分）大岡昇平

2. 指導の過程

1) 三編とも通読・精読・味読の段階を実施したが、『春の鳥』では、A・B・C組とも第一次感想文を書かせた。三編を終えたところで、A・B組に三編についての第二次感想文を書かせ、C組は三編について話し合いをさせた。第一次感想文は1/2ザラ半紙に20分で書かせ、第二次感想文はザラ半紙に50分間で書かせ

た。話し合いは、30分間は小グループで、20分間は全休で行なった。

2) 第二次感想文から

A. 好きな教材——A・B組97名（男64・女33）の、好きな、あるいは感銘を受けた作品は次の通りである。

	男	女	計
春の鳥	28	16	44
闇の絵巻	17	7	24
俘虜記	19	10	29
計	64	33	97

i. どんな点に感動ないしは共鳴したか。

上記の44・24・29名について、代表的な感想を示そう。①②……は多い順を示す。

a. 春の鳥 ①六蔵は純粋で素直で無垢・自然そのものであり、自然に帰ったのである。②美しく、ロマンチックで、幻想的ですがすがしい。③絆情的な詩的な風景描写がよい。少数意見として、同情・あわれみ・好奇心はいやだ、死んだほうが幸福だった、生と死・人生と自然について考えさせられる、哀れであるが明るい、母の愛は白痴だけによけい哀れである、などがある。

b. 闇の絵巻 ①的確で写実的でしかも詩的な表現がすばらしい、②闇の中に美しいもの・真実を見いたし、そこにやすらぎを感じているところに共感、③恐怖心と安堵とが実感をもって迫ってくる。少数意見として、近代的な感覚であり、孤独さがよく出ている、題材と小説としての形式の特異さ、暗い人生、死の予感、闇は安息を与えるが死によって全き安息を得る、など。

c. 俘虜記 ①極限状態におかれた人間の複雑な心理と行動が、論理的に順序よくうまくとらえられていておもしろく、スリルがありひきつけられる。②米兵を撃たなかった彼の人間的な、人間尊重の精神に敬意を表す。③偶然というものはその後の運命を変えてしまうものである。④生と死という問題、道徳性というようなことについて考えさせられる。⑤人間尊重の面は尊敬するが、日本人としては撃つべきではなかったか。⑥当時の国家主義体制下に生きた人間として撃つのが当然であったのに、それをあえてしなかったところに彼の人間的な側面をみることができる、など。

3) 第一次感想文と第二次感想文とから

一次と二次であまり変わらない生徒も若干はいたが大部分の生徒は、二次は一次とはやや違った、もしくは、より深まった感想を述べている。2例を示す。

。A男 1. 「かわいそうだ。氣の毒だ。だれかなんとかしてやれ。」僕はこう叫びたい。人並みのことが彼にはできない。それでいて、鳥を「カラス。カラス。」と追いかける、暗い心もなく明るい少年である。それがいっそう哀れさを感じさせる。何とかしてやりたい、と痛切に感じた。

2. けがれに満ちた世俗へのいきどおりが、「六蔵」という少年をテーマにして強く描かれている。白痴であるゆえに天使のように清く美しく見える。けがれに満ちた世俗の世界に染まっていない少年を中心にくり広げられる人間愛。少年の死によって白痴の少年が、純粋な存在となり、自然と一体となった、そういう境地への強いあこがれが美しく描かれている。いかにもロマンチックで、自然とその世界へ引き込まれていく感じを受けた。「死」というものが、美しく感じられた。

。B女 1. ごちゃごちゃしていないで、詩のようなすっきりした感じ。人間と動物との違い、生と死についての問題が興味深い。まわりくどくわかりにくい表現でなく、わりあい読みやすい。白痴のような女でも、自分の子を思う親心は普通の親と変わらない。その思う子が白痴なだけに、いっそう何か哀れに感じるのであろうか。

2. 作者の感じたことがまるで詩のように描かれていると思う。どぎつい、心をさすような表現はされていないが、読み終わったあと、何か心に感ずるものがある。白痴の少年六蔵は生きているときも自然といっしょであった。醜い人間世界は彼には存在していなかった。彼の心は自然に対してだけ、特に鳥に対して開かれていた。だから、作者には、そんな六蔵が死んだことは、もちろん悲しいことに違いないが、なにか自然なことのように思えたと思う。

4) グループ・全体での話し合いから

グループ別での話し合い、その後の報告を兼ねての全体の話し合いでは、前者がより活発で有意義であった。一斉授業では見られない活発なやりとりが行なわれた。平素あまり話さない生徒が見違えるほどいきいきとして、感想文に書いたのより以上に、生と死・眞実・道徳・人類愛・人間性・愛国心といったものについて話し合うことが多かった。

III 考 察

1. 3教材のもつ意味

数の上では『春の鳥』・『俘虜記』・『闇の絵巻』

という順で生徒の好みに差はあるが、それぞれに教材としての意味を充分もっている。『春の鳥』では、悲しくも美しい自然と人間の浪漫的世界にひかれ、『闇の世界』では、暗い憂鬱をこめた近代人の不安な気持ちに共鳴し、象徴的な詩的な写実的な描写に感銘を受け、『俘虜記』では、極限状況下におかれた人間の複雑な心理の分析に興味をおぼえ、生と死・偶然と必然・倫理性について考えさせられている。

2. 教材としての『春の鳥』

まず、高2あるいは高校の教材としての意義は充分あるとみたい。前述のように、3教材の中では多くの生徒から支持され肯定されている。それが清らかな美しさの面でとらえられたいとしても、それでいいのではないかと考える。反面、否定的な生徒もかなりいるということは、批判的・批評的な読み方をさせるという面でまた意義があるのではなかろうか。否定的な感想としては、。飾られた、非現実的な内容で、六蔵の死は現実逃避ではないか、。六蔵を死なせることによって話をおもしろくしてはいるが、人間はだれでも生きる権利があるはずだから、それを死なせるのは人間的でない、。同情やあわれみ・好奇心はよくなく、『私』もそこから出発している、。怪しく、気味悪くあと味の悪い、嫌悪を感じる作品である、などがある。派生的な感想として、。白痴はだれの罪でもないのだから、回りの人がもっと気をつけ、医術を進歩させて救ってやり、国が保護すべきである、などがある。

中2あるいは中学の教材としては、滝藤教官の発表にみられる中学生の読み取り方はそれでよく、それなりに意義があると考えられる。というのは、高2では中2と違った、あるいは、深まったく読み方をするからである。従って、『春の鳥』は国語科の教材として否定される理由はない。しかし、滝藤教官もいうように、独歩の作品としては、『春の鳥』以上にいい作品があるかも知れない。それはそれとして補助教材として活用すれば、より効果があがると思う。

3. 理解と表現——読むことと書くこと

読むことを主体とした学習とくに小説などの場合、話し合いを取り入れることは効果がある。とくに小グループの話し合いは生徒に国語学習への興味を持たせることにもなる。書くことは読むことを深めることは既に述べたが、読後感を書かせ、また簡単な主題で創作させることは、小説の鑑賞をより深いものにさせる。かくて、「読むこと」と「書くこと」とはつながるものであることを、ふたたび強調したい。